

アクティブラーニング ——文章作成の技法——

荻原 桂子・宮本 和典

九州女子大学人間科学部人間発達学科人間基礎学専攻

北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2015年11月12日受付、2015年12月17日受理)

はじめに

2015年2月28日(土)3月1日(日)同志社大学に於いて「第20回FDフォーラム」(公益財団法人大学コンソーシアム京都主催、文部科学省・京都府・京都市後援)が開催された。「学修支援を問う～何をどこまでやるべきか～」をテーマとしたフォーラムが、1日目はシンポジウム、2日目は14の分科会に分かれて実施された。ここでは、2012年8月28日に提起された中央教育審議会の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」を受けて、「このような時代にあって若者や学生が、生涯学び続け、どんな環境においても答えのない問題に最善解を導き出す能力を育成することが大学教育の直面する大きな目標」であることが会場の共通認識として議論された。シンポジウムで、村上正行氏は「学生には授業時間内にとどまらず授業のための事前の準備、持論展開、主体的な学びに要する時間を含めて、十分な学習時間の確保が必要になってきます。単位を実質化するということが話題になりますが、そういった話も含めて学生の学習時間をどう確保していくかが問題になってきます」と述べ、「何にしても主体的な能力を獲得してもらうという事が我々の大学人としての使命であろう、ということです」と指摘している¹。同じく、溝上慎一氏は「要は授業外学修時間です。日本では自学自習の文化、そういう考え方がずっとありますので、やりたい学生が教室外でやる自主学習のことを授業外学修というのではなくて、きちんと教員が課していくものだということです」と述べ、「与える課題とは別にプロアクティブの姿勢や態度というのを作ってくというのがあると思います。あるいはディープラーニングの一つの定義ですが、自分の持っている比喻知識や経験、そういったものと今学んできたことを繋げてみる。そういった復習や授業内で繋げていくような、そういった活動も必要だと思います」と指摘している²。ともに、授業外学修時間やアクティブラーニングの主体的な学びの捉えなおしについての提言であった。各分科会では、学生の多様化に即した学修支援のあり方が報告され参加者から質疑応答があった。

平成26年度に引き続き、平成27年度は九州女子大学・九州共立大学2大学の総合共通科目「日本語表現法Ⅰ」「日本語表現法Ⅱ」における「アクティブラーニング——文章作成の技法——」の共同研究に取り組んだ。学士課程のなかでも総合共通科目は具体性の高いもの

であるべきで、「日本語表現法Ⅰ」「日本語表現法Ⅱ」は大学教育の基盤となる授業科目である。本論は、平成27年度実施した共同研究「教員間の連携と協力による授業等の組織的教育」に関する論考である。原文引用以外では、アクティブラーニング、協同学習という表記を使用する。

1. アクティブラーニング

中央教育審議会は、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(答申)の「用語集」で「アクティブ・ラーニング」について、次のように述べている³。

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。初等中等教育および大学教育でアクティブラーニングを牽引する溝上慎一氏は、「アクティブ・ラーニング(以下AL)は、北米で1990年代初頭に提唱された(Bonwell & Eison,1991)、講義脱却と学習と成長パラダイムにおける大学教育における学習論である」と述べたうえで、アクティブラーニングを次のように定義している⁴。

一方向的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表などの活動への関与と、そこで生じる認知プロセス*の外化を伴う。

*認知プロセスとは、知覚・記憶・言語、思考(論理的/批判的/創造的思考、推論、判断、意志決定、問題解決など)といった心的表象としての情報処理プロセスのことである。

文部科学省の「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」という説明に対して、溝上氏は一方的な講義形式を脱却すると同時に、授業を聴くだけでなく、授業に「書く・話す・発表する」という活動を取り入れることで「認知プロセスの外化」を図り、他者と関わることで、学習を個人的なものから社会的なものに拡大していくことが重要であると述べている。2014年11月20日、下村博文文部科学大臣より中教審へ「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」と題する諮問が出され、「アクティブラーニング」が大きく取り上げられたことから、世間一般でもアクティブラーニングへの関心が一挙に高まり、テレビの報道番組や雑誌でも特集が組まれ紹介されることが急増している。溝上氏は「アクティブラーニング(AL)」について「大学教育における講義一辺倒の授業脱却の御旗であるこの用語が、初等中等教育まで降ろされ使用される格好である」と指摘している⁵。初等中等教育でアクティブラーニ

ングは意外と速いスピードで定着していることから、現在の高等教育機関で実施されるアクティブラーニングは、初等中等教育で実施されるアクティブラーニングの延長線上に見据えられなければならない。高大接続と大学教育改革および初等中等教育が一体的に進められることが望まれる。また、溝上氏は「ALの用語の導入は、言語活動をALの中核的活動と位置づけて、学校教育全体として仕事・社会に繋いでいく、最大の、おそらくは最後の機会である」⁶と指摘し、言語活動を中心としたアクティブラーニングの積極的な取り組みが必要であると述べている。さらに2008年の中学校、2009年の高等学校の学習指導要領の改訂では「言語活動の充実」が謳われていることから、初等・中等、高等教育に携わる教員は、一丸となって言語活動を中核としたアクティブラーニング型授業の実施を推進していかなければならない。

最初に大学でアクティブラーニングの重要性が叫ばれたのは、社会が求める能力の変化にある。武谷嘉之氏は「大学進学率が50%を超え、社会への人材供給の過半を担う時代となった現代においては、大学教育のAL化は喫緊の避けられない課題である」⁷と述べ、教員にとっても学生にとっても最もハードルの高い「PBL (Project Based Learning)」すなわち課題探求型AL実施のために、アクティブラーニングをパッケージとしてカリキュラム化する具体的な方法や内容を公開している。アクティブラーニング実践プロジェクトでは「OECDがキー・コンピテンシーの概念を発表し、PISA型学力調査のプログラム開発を始めたのは1997年のことだが、その背景として、テクノロジーの急速な発展によって社会の変化が激しくなり、社会で求められる能力も基礎学力のような一度習得すればそれで終わりとはなくなったことがある」と分析したうえで、アクティブラーニングが高等教育で必要とされるようになった理由を述べている⁸。特に「変化への適応力」や、他者との相互依存の強まりの中での「対人関係を調整する力」、課題の複雑化の中での「解決能力」などが問われるようになってきたのである。

キャリア教育という視点からも、アクティブラーニングは有効である。溝上氏が「アクティブラーニングは、知識習得以上の、活動や認知プロセスの外化を伴う学習を目指すし、そのような学習を通して身につけた技能や態度（能力）が社会に出てからも有用であるという考え方にもとづいて推進されている」⁹と指摘しているようにアクティブラーニングは社会人としての「技能・態度（能力）」すなわち社会人基礎力や汎用的技能を養成するのに効果的な学習法であることがわかる。対人関係スキルや問題解決能力と言った現代社会に必要とされる技能・態度（能力）は、今までのような一方的な講義形式の授業では身につかない。情報コミュニケーション技術（ICT）の発展で、知識の価値は低くなり、現代のような「模索型の知識基盤社会」¹⁰においては資料の検索における「情報リテラシー」への技能・態度（能力）が重要な課題である。

2. 仮説の検証—資料の検索

アクティブラーニングでは、「学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る」とされている。テーマを批判的に分析し、問題や課題を設定し、その解決のために仮説形成と仮説検証を行うことができるようになることが求められる。そのためには、資料を調べ、必要な情報を抽出し、証拠に基づいて、既に分かっていることは何かを明らかにし、新しく考え、新しく分かったことをまとめていく必要がある。大学で求められる学術的な文章には、レポート、レジュメ、卒業論文や研究学術論文などがある。それらの特徴として、問題と答えが示され、論理的な説明と論証で構成されていることや、根拠となる説明としての情報が明らかにされていることなどが必要とされている。答えと根拠情報を明らかにするために調査し、得られた情報を整理し、正しい論証になることが求められる。

レポートや論文を書くための基本プロセスとして、(1) テーマ選択では、事前調査として、基礎知識、用語の確認、キーワードの決定を行い、テーマを具体的に決定していく。(2) 資料の収集では、文献調査、実験、フィールド調査などがあげられる。文献調査では、調べるツールを選択し、キーワードの決定・検索・検索結果の確認を行い、文献を実際に入手していく。(3) 実際に執筆・校正を行うという流れとなる。このうち、(1) テーマ選択、(2) 資料の収集において情報の検索を行っていくことになる。

まずは自らの基礎知識を補強するため、辞典や事典、ウェブ版百科事典、インターネットなど、事柄を調べるツールはたくさんあるので、それぞれの特徴を理解し、適切に使い分ける必要がある。基本的な情報・大まかな情報として概要、解説や一般論、用語の定義や意味を検索し、専門的な情報・細やかな情報として最新の研究動向や統計データを検索していくことが重要である。事前調査では、まず、基礎知識を辞典や事典を使い補強していく。辞典や事典は、専門家が包括的かつ簡潔に解説し、信頼性が高く、関連情報も多く、体系的にまとめられており、情報が固定され、蓄積されている。インターネット上で利用できる百科事典は、冊子体の百科事典とは異なり、複数の辞典や事典を一括して検索することができ、全文検索機能やリンク機能、最新情報が掲載されやすいなどの特徴をもつ。

インターネットでの調査には、流動性、不確実性、可能性の排除に注意が必要である。流動性とは、多種多様な情報が次々と更新されるため、過去の参照が困難となる。不確実性とは、不安定な情報で不正な情報発信や改変が考えられる。可能性の排除とは、インターネットでは検索機能が使われることが多く、検索上位の情報以外を入手することが困難である。一般的な検索エンジンでは、一般的な検索を想定しており、キーワードは一般的な形で処理されるため、学術的な情報を探し出す工夫が必要である。検索結果は、検索エンジンに最適化されている場合があり、必ずしも求める情報が上位とはならない場合がある。そこで、流動性については、WARP (<http://warp.da.ndl.go.jp/>) やThe Internet Archiveのようなイ

インターネット資料収集保存サイトを利用することができる。WARPとは、国立国会図書館が行っているインターネット資料収集保存事業で、公的機関のウェブサイトとして国の機関、地方自治体、独立行政法人、国公立大学などや、民間ウェブサイトとして、公益法人、私立大学、政党、国際的・文化的イベント、電子雑誌などを主な対象として、発信者の許諾を得られたものを収集・保存している。The Internet Archiveとは、アメリカの非営利団体が運営し、インターネット上のウェブ情報を収集保存しているサイトである。不確実性については、安易に信用するのは危険な場合もあるが、情報の信頼性を判断する材料として、ドメイン名から判断する方法がある。例えば、検索サイトで「キーワード site:go.jp」とすると日本の政府機関に限定して検索することができる。信頼できる機関等によって作成されたリンク集、例えば、リサーチ・ナビ (<http://rnavi.ndl.go.jp/>) などを活用する方法もある。リサーチ・ナビとは、図書館資料、ウェブサイト、各種データベース、関係機関情報を、特定のテーマ、資料群別に紹介したウェブサイトである。

図書と違ってインターネットの違いは、インターネットで検索して出てくる情報には注意が必要である。インターネットは、情報の信頼性が低いということである。図書では、内容に責任が持てる著者が書き、編集者のチェックを受けているのに比べ、インターネットの情報は一般に信頼性が低いといえる。書いた人がどの程度の知識や確信を持って書いているかわからず、間違った情報が書かれていることもある。例えば、Wikipediaでは「基本的に専門家による査読がなく、不特定多数の利用者が投稿するというシステムゆえに、情報の信頼性・信憑性や公正性などは一切保証されておらず、ウィキペディアの方針に沿わない利用者の編集により問題が起こることもあり、いくつかの問題や課題も指摘されている」のが実情である。他の信頼できる情報を合わせて参照する必要がある。信頼性の高い情報の収集・分析・考察により客観的根拠に基づいた論理的主張となる。信頼できる情報を得るには、信頼できる資料を利用することが必須となる。信頼できる資料を得ることができるのが図書館であり、図書館で得られる資料は大きく分けて一次資料と二次資料となる。

一次資料とは、調べたい情報について著作者が直接書いているもので、書籍、雑誌、学術論文などのことをいう。二次資料とは、多くの一次資料の内容をまとめて解説し、どの一次資料にどのような情報がのっているかをまとめている資料である。辞書、年鑑、百科事典、専門辞典、学術データベースなどのことをいう。情報の信頼性を考慮すると、二次資料をそのまま引用することは避け、情報の利用や引用する場合には、一次資料に基づくものが必要であり、二次資料は一次資料を知るための手がかりとして利用する。初めから一次資料を探し出すのは簡単なことではないので、二次資料を利用する。信頼性の高いインターネット上の二次資料としてはCiNii (学術論文データベース) などのデータベースがある。図書館の所蔵を調べる方法として、OPAC (Online Public Access Catalog) がある。また、図書館のリファレンスサービスを利用する方法もある。

3. 議論の技法—ツールミンモデル

ここで、協同学習における議論の技法について考察する。イギリスの分析哲学者スティーヴン・トゥールミン (Stephen Toulmin) は、主張と根拠を結合する仮定を論拠と命名し、議論の仕組みを「主張」「根拠」「論拠」の3つの要素で示した。トゥールミンの「議論の技法」に関しては、戸田山和久氏・福澤一吉氏が紹介するように「データと結論を論拠 (warrant) が結び、論拠にさらに裏づけがなされる」¹¹ものである。福澤氏は、トゥールミンが提案した「議論の技法」モデルとして、図1のような「トゥールミンの論証モデル」を作成している¹²。

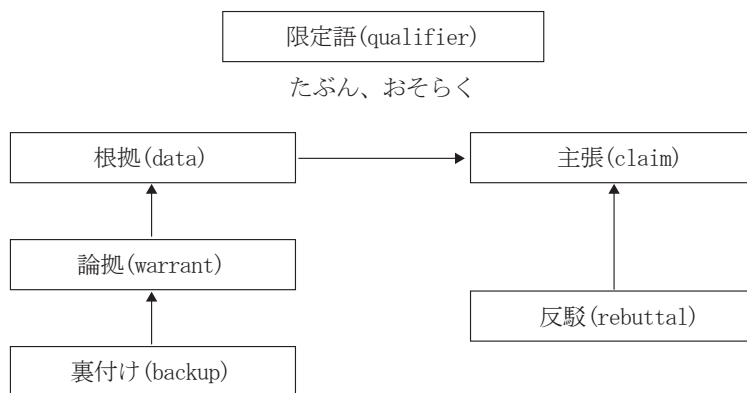


図1 トールミンの論証モデル (福澤一吉)¹³

このモデルは、根拠、主張、論拠、論拠の裏づけ、限定語、反駁という6つの構成要素からできている。トゥールミンは、議論を展開するには、この6つの構成要素が必要であると述べている。この論証モデルは、思考のプロセスを可視化するモデルとして有効である。

さらに、牧野由香里氏は、「思考のプロセスを可視化するモデル」¹⁴として、図2のような「議論の十字モデル」を作成している¹⁵。



図2 議論の十字モデル (牧野由香里)¹⁶

牧野氏が紹介した「議論の十字モデル」を使用して学生の文章作成指導を実施した。宮沢賢治『銀河鉄道の夜』をテキストにして、全体授業で音読テープを使用し作品読解をしたう

えで、5～6人のグループに分けて「十字モデル」を使った文章作成に取り組んだ(写真1)。各グループに7枚の用紙を配り、7つの構成要素を理解させた。縦軸となる3つの要素(背景・命題・提言)には、問題意識・主張したい仮説・解決策の提案を具体的に書かせた。右翼となる要素(抽象・具体)には、根拠となる考え・事実データを具体的に書かせた。左翼となる要素(反論・論駁)には、主張と異なる立場・主張を守る立場を具体的に書かせた。各グループにおいて協同で討論した内容を箇条書きにして、7枚の構成用紙に清書したものを「十字モデル」の構成要素として黒板に貼り付け、代表者がプレゼンテーションをした(写真2)。グループ以外の学生から質疑があり、発表者が応答した。結果をグループにおいて協同で修正し全体の整合性を整え、協同で文章を作成し、最後に完成論文として発表した。



写真1 十字モデルを考える



写真2 グループでのプレゼンテーション

トゥールミンの「議論の技法」に基づく「十字モデル」を使いこなすことによって、学生は協同学習によるアクティブラーニングからさらに学びを深めたディープ・アクティブラーニングを実践することができた。学生の「議論の技法」を使った発表を評価するには、ルーブリックの作成が極めて重要になってくる。「議論の十字モデル」に基づく評価の観点で牧野氏は、全体(有機的な関係性)、内容(情報の質と量)、要素(各要素の有無・要素間の関係)から提示している¹⁷。最初の段階では「構成要素を組み立てる設計図」として、次の段階では「情報の密度を高める器」として、最後の段階では「全体のバランスを保つ方位磁石」として、「十字モデル」を活用することで「完成度の高い論文を仕上げることができる」と指摘している¹⁸。

対話の深化という観点から、「十字モデル」を使った議論や文章作成は、協同学習には最適であると考えられる。抽象的な言語表現を、他者とともに言語化する過程で、抽象的な観念が具体的なイメージを持った意味を形成する。自分だけのイメージが、他者と共感できるという認知プロセスが協同学習の最大の長所である。自分と他者との関係性を内省する視点は、自分と社会とを結びつける接点にもなる。

また、思考のプロセスを可視化することで、論文全体が俯瞰できるということに加えて、他者とのすり合わせで論文を修正することで、独りよがりの偏った思考を普遍的な軌道に修正することが出来る。

学生たちの自立的な学修を支援するうえで、対話を中心とした文章作成の技法を指導していくことが重要である。学生たちの協同的な学びを育てる有効な文章作成の技法として、「十字モデル」は効果的である。文章に不可欠な要素やそれぞれの機能を明確に視覚化する「十字モデル」を論理的な文章作成の技法と併用することで、相乗的に明晰で論理的な文章作成が可能となる。文章作成の論理的な学びとならんで重要な文章作成の技法が、パラグラフライティングである。

4. パラグラフライティングの技法

論理的な文章を書くためのパラグラフライティングは、アクティブラーニングの実践において重要な文章作成の技法である。「十字モデル」による論文作成にあたり、7つの構成要素を文章にするために、学生は次の5つの学習に取り組んだ。

1. 課題を分析して「問い」と仮の「答え」（仮説）を立てる。
2. 「答え」（仮説）の根拠情報を探す。
3. 情報を整理して、アウトラインを練る。
4. パラグラフライティングで、アウトラインを文章にしていく。
5. 全体の文章を整える。

それぞれ自分が書いた文章を読み合わせ、グループで話し合い、代表者がプレゼンテーションをする。「書く、話す、発表する」というアクティブラーニングは、協同学習のなかで文章作成を通して実施されるのがもっとも効果的であると考えられる。アカデミックライティングで必要とされる論理的な文章は、パラグラフを基本単位とし、パラグラフは特定の役割を担ったセンテンスで構成される。木下是雄氏は、パラグラフとは「文章の一区切りで、内容的に連結されたいくつかの文から成り、全体として、ある一つの話題についてある一つのこと（考え）を言う（記述する、主張する）ものである」¹⁹と定義している。パラグラフとは論文を作り上げるための最小構成単位であり、論理的な文章を作成するにはパラグラフライティングの技法を習得することが肝要である。日本人は結論を先に述べることに文化的に抵抗があるが、欧米では学生時代にパラグラフライティングを徹底的に訓練されることから論理的な文章においては一般的である。パラグラフライティングで注意しなければならないのは次の5点である。

1. 一つのトピックは一つのパラグラフのみで構成する。
2. パラグラフの第1文はトピックセンテンスとし、付加的情報は第2文以降で補う。
3. 展開、並列などのパラグラフ間の関係をサポーティングセンテンスで明確にする。

4. パラグラフの最後にコンクルーディングセンテンスとして、トピックセンテンスの内容を再度書く。内容は同じものでなければならないが、文章は変えて表現する。

5. トピックセンテンスと無関係な文はそのパラグラフには含めてはいけない。

福澤一吉氏は表1のように、パラグラフの基本構造は、トピックセンテンス、いくつかのサポーティングセンテンスとコンクルーディングセンテンスからなると説明している²⁰。福澤氏の「パラグラフ構造」を参照して、「パラグラフの基本構造」を表1のように作成した²¹。

表1 パラグラフの基本構造

《パラグラフの基本構造》
①トピックセンテンス (Topic Sentence) パラグラフの柱となる話題や考えを1文で表現したもので、論証では主張・結論にあたる。パラグラフの冒頭に置く。
②サポーティングセンテンス (Supporting Sentence) トピックセンテンスを支援・支持する内容の文で、トピックセンテンスの後に置く。
③コンクルーディングセンテンス (Concluding Sentence) トピックセンテンスで述べたことを再確認したり、サポーティングセンテンスの内容を含めてトピックセンテンスで述べた考えをまとめ直したりする文。パラグラフの末尾に置く。

論文は構造化された文章である。論文にはタイトル・著者名のあとに、アブストラクト、本体、まとめがあり、注や引用・参考文献一覧が添付される。アブストラクトとは論文の内容を要約したものであり、論文の目的や結論、本論の進め方について述べる。また、本体では、問題提起、主張、論証がアウトラインに従って論理的に展開されなければならない。戸田山和久氏は論文には構造を与えるアウトラインがあり、論文はその「アウトライン」が「きっちり透けて見えるようなものじゃないといけない」と指摘している²²。

論理的な文章を書く場合は、アウトラインを使って、パラグラフ構造で書くことが大切である。パラグラフで書くとき最も重要なのは、一つのパラグラフには一つの結論ないしは主張しか書いてはいけないということである。また、論理的な文章を読むクリティカルリーディングに関しても、福澤氏が「トゥールミンモデルを使用して、①対象となるテキストに含まれる論証の構造を取り出し、論証図を作ります。②根拠の背景をチェックします。③明示されていない論拠を推定します。④論証が反駁される可能性のある根拠を推定します。」²³と説明している。トゥールミンモデルは文章作成だけでなく、文章を論理的に読み解くためにも有効な技法となる。論証の推測力や関連性を評価することで、新たな問いが生まれるのである。

5. 協同学習とレポート評価のルーブリック

高大接続と大学教育改革および初等中等教育が一体的に進められようとしている現代、高等教育におけるアクティブラーニングの導入は重要課題となっている。「書く、話す、発表する」といった能動的な学習を実現するには、協同による活動性の高い授業づくりを工夫していくことが大切である。協同学習の実践には、①話し合いの技法、②教え合いの技法、③問題解決の技法を使った多様な授業づくりが、小学校・中学校を中心に高等学校さらに大学の教育現場で活発に展開されている。議論のさまざまな技法を学ぶことで、アクティブラーニングは深い学びとなる。

安永悟氏は、「社会的相互依存理論に基づく協同学習 (Cooperative Learning)」²⁴を信憑性の高い有効な教育理論として紹介している。「協同による活動性の高い授業づくり」を目指すなかで、安永氏は、ジョンソンらの「5つの協同学習の基本要素」について、①肯定的相互依存:協同学習では、グループの学習目標を達成するために、基本的な信頼関係に基づき、各自のもつ力を最大限に出し合い、仲間同士が互いに依存し合うことを求めている。②積極的相互交流:肯定的な相互依存関係があっても、積極的に交流しなければ学習効果は期待できない。③個人の2つの責任:学生1人ひとりに2つの責任がある。1つは自分の学びに対する責任であり、1つは仲間の学びに対する責任である。④社会的スキルの促進:グループでの学び合いに必要な学習スキルや対人関係スキルがある。⑤活動のふりかえり:グループを用いた学習活動の質を高めるために、協同学習では活動に対する建設的な評価を求めていることを列挙している²⁵。安永氏は、5つの基本要素が満たされた活動を協同学習とみなし、一般的なグループ学習と区別している。安永氏は、協同学習に期待される効果や評価に関して説明したうえで、「LTD話し合い学習法」について紹介し、LTD (Learning through Discussion) の目的とは、「学修教材である課題文を仲間と協力して深く読み解くこと」²⁶であると述べている。学生が「課題文をまず1人で予習し (個人思考)、次にミーティングで仲間と学び合う (集団思考)」ことで、読解段階、討論段階、文章作成段階という授業を展開するという変化成長を実感できる授業である。「書く、話す、発表する」というアウトプットの活動 (ディスカッション、ダイベート、プレゼンテーションなど) を実施することで、授業者からの一方向的な知識伝達型授業を脱して、学習者の能動的なアクティブラーニング型授業への質的転換をはかることが重要である。さらに進んで、学修の形態を強調することから、学修の質にこだわることで広くジェネリックスキルは磨かれ、高次のアクティブラーニングへと進化することができる。

ここで、協同学習において作成した文章の評価について考察する。松下佳代氏・小野和宏氏・高橋雄介氏の「レポート評価におけるルーブリック」を参照して、課題のレポート評価について、①知識・理解、②問題発見、③情報検索、④論理的思考と問題解決、⑤文章表現の5つの観点からレポート評価におけるルーブリックを表2のように作成した²⁷。5項目に

わたってすべてレベル3の場合は最高点100になり、すべてレベル1の場合は最低点50となる。ルーブリックは、「教育内容に関わるというよりも、教育方法である」²⁸というように、教員と学生が協同して教育効果を高めるものでなければならない。

表2 レポート評価のルーブリック

観点	知識・理解	問題発見	情報検索	論理的思考と問題解決	文章表現
レベル3 20点	自分が選択した課題について、多角的に検討し、その本質を理解している。	与えられたテーマから自分で課題を設定し、その問題を取り上げた理由や背景についての確に述べている。	必要な情報を書籍などから収集し、レポートの最後に出所を確認できる形で引用文献として記載している。	収集した情報を分析的・実証的・論理的に考察し、自分なりの根拠ある意見を導きだしている。	序論から結論にいたる文章の組み立て、記述の順序、パラグラフの接続が整っており、論理的に書かれている。
レベル2 15点	自分の選択した課題について、多角的に検討しているが、その本質の理解は不十分である。	与えられたテーマから自分で課題を設定しているが、その問題を取り上げた理由や背景の内容が不十分である。	必要な情報を書籍などから収集しているが、その収集が不十分であり、信頼性の低い情報が散見される。	自分なりの意見を導き出しているが、収集した情報、あるいは考察が不十分で意見の根拠が弱い。	序論から結論にいたるアウトラインはおおむね整っているが、記述の順序やパラグラフの接続に問題がある。
レベル1 10点	自分が選択した課題について単純な理解にとどまっている。	与えられたテーマから疑問や問題を見いだせず、自分なりの課題が設定されていない。	情報の信頼性が低い。また、レポートの最後に引用文献が記載されておらず情報の出所が不明である。	情報収集のみで、自分の意見がない。あるいは、意見と事実の混同が見られる。	序論から結論にいたる過程の記述が曖昧で、論理の流れが理解できない。

ダネル・スティーブンス氏は、ルーブリックの基本要素は課題・評価尺度（達成レベル・成績評価点）・評価観点（課題が求める具体的なスキルや知識）・評価基準（具体的なフィードバック内容）の4つであり、課題の特徴を規定すると指摘している²⁹。教員は、良い文章を判断することはできるが、良い文章とはなにかを学生に理解させる方法に問題を抱えている。この問題を解決するのに「レポート評価のルーブリック」は有効であるといえる。

おわりに

21世紀の大学教育は混迷を極めている。横文字やアルファベットの頭文字が飛び交い、賑わっている。「国際バカロレア」はヨーロッパ仕様の国際基準カリキュラムであるが、福田誠治氏は「グローバリズムに動かされた教育改革という流れの向きは定まっている」と指摘する³⁰。学習者を能動的に関与させなければならないという教育環境のなかでアクティブラーニングをどのように取り入れていくかが重要な問題となっているのである。ただ、アクティブラーニングと一口にいても、その内容は多種多様な広がりを見せるなか、アクティ

ブラーニング型授業の技法として「協同学習」がさまざまな場面で活発に実践されている。エリザベス＝バークレイ他による『協同学習の技法』には、「話し合いの技法」「教え合いの技法」「問題解決の技法」「図解の技法」「文章作成の技法」が列挙されている³¹。その中でも「文章作法の技法」には、「日誌（ジャーナル）に自分の考えを書き、ペアで交換し合っ
てコメントや質問を書く」（「ダイアログ＝ジャーナル」）、「与えられたテーマに対する回答を語句や短い文章で紙に書き、次の人に渡す。渡された人も同じことをおこなう」（「ラウンド＝テーブル」）、「小論文（エッセイ）用の質問と、その質問に対する模範解答を作成する。質問をペアで交換し合い、その質問への解答を書いた後で模範解答と比較する」（「ダイアディック＝エッセイ」）、「パートナーが書いた小論文やレポート、議論、研究論文などを批判的に読み、校正を加えながら論評する」（「ピア＝エディティング」）、「グループでフォーマルな原稿を書き上げる」（「コラボラティブ＝ライティング」）、「グループで批評しながら、科目に関連する課題図書用の資料集を作成する」（「チーム＝アンソロジー」）、「論文を書き、その論文のプレゼンテーションをおこなう。グループの中から選抜した数名の学生により公式な批評を受け、グループ全体で論文に対する総合的なディスカッションをおこなう」（「ペーパー＝セミナー」）といった7つの技法が紹介されている³²。どの技法も、異なったユニークな機能を持ち、協同学習の効果を十分発揮しながら文章作成能力を高めることができる技法であり、文章作成の授業のなかで取り入れ、活用できるものばかりである。松下佳代氏が提唱する「ディープ・アクティブラーニング」とは、「深い学習」「深い理解」「深い関与」という、「深さ」の系譜をふまえたものだという³³。アクティブラーニングにおいて、内的活動と外的活動に「深さ」を極めることで、ディープ・アクティブラーニングが実現できるというのである。教育におけるICTの目覚ましい推進による電子機器導入で、教室からチョークや黒板や黒板消しが消える日も近いかもしれない。しかし、たとえ教室の懐かしい風景が消失しても、教室から児童・生徒・学生が消えることはない。社会に真に貢献できる人間育成という大学教育への関心が高まるにつれ、社会人として自律した個人を育てるための大学教育は、新たな局面を迎えているといえる。

注

¹ 村上正行『第20回FDフォーラム報告集』公益財団法人大学コンソーシアム京都主催、2015年6月、p.5

² 溝上慎一 同掲書、p.18p.23

³ 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(答申)、2012年8月28日、p.37

⁴ 溝上慎一「大学教育から初等中等教育へと降りてきたアクティブ・ラーニング」人間教育

- 研究協議会編『アクティブ・ラーニングとは何か』金子書房、2015年8月、p.6
- ⁵ 溝上慎一「大学教育から初等中等教育へと降りてきたアクティブ・ラーニング」前掲書、p.8
- ⁶ 溝上慎一「大学教育から初等中等教育へと降りてきたアクティブ・ラーニング」前掲書、p.10
- ⁷ 武谷嘉之「高等教育としてのアクティブ・ラーニングを導入するためのカリキュラム設計」人間教育研究協議会編『アクティブ・ラーニングとは何か』金子書房、2015年8月、p.94
- ⁸ アクティブラーニング実践プロジェクト編『現場ですぐに使えるアクティブラーニング実践』産業能率大学出版部、2015年8月、p.11
- ⁹ 溝上慎一「アクティブラーニングとは」『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂、2014年9月、p.13
- ¹⁰ 溝上慎一「なぜアクティブラーニングか」『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』同掲書、p.54
- ¹¹ スティーヴン・トゥールミン著、戸田山和久・福澤一吉訳『議論の技法』東京図書、2011年5月、p.384
- ¹² 福澤一吉氏は、「トゥールミン・モデルを単にオリジナルのままで紹介するのではなく、私が面白いと考えている議論との関係で、トゥールミンの議論モデルを修正しながら話を進めます」と述べ、トゥールミンの議論モデルを「トゥールミンの論証モデル」として提示している。『議論のレッスン』生活人新書、NHK出版、2002年4月、p.68
- ¹³ 福澤一吉『文章を論理で読み解くためのクリティカル・リーディング』NHK出版新書、2012年4月、p.93
- ¹⁴ 牧野由香里「「十字モデル」で協同的に論文を組み立てる」関西地区FD連絡協議会・京都大学高等教育研究開発センター編『思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント』ミネルヴァ書房、2013年3月、p.34
- ¹⁵ 牧野由香里氏は「まず、論理的思考の要となる演繹法・帰納法を「抽象⇔具体」という柔軟な表現に集約した。これはアリストテレスの「enthymeme・example」に基づく。また、説得表現に含まれる要素を図式化した。これはトゥールミンの「the Layout of Arguments」「Toulmin,1958」を参考にした」と述べている。同掲書、p.32
- ¹⁶ 牧野由香里 同掲書、p.34
- ¹⁷ 牧野由香里 同掲書、p.50
- ¹⁸ 牧野由香里 同掲書、p.49
- ¹⁹ 木下是雄『レポートの組み立て方』ちくま学芸文庫、1994年2月、p.180
- ²⁰ 福澤一吉『議論のレッスン』生活人新書、2001年4月、p.124
- ²¹ 福澤一吉『文章を論理で読み解くためのクリティカル・リーディング』NHK出版新書、

- 2012年4月、p.174
- ²² 戸田山和久「論文の種としてのアウトライン」『新版 論文の教室』NHKブックス、2012年8月、p.105
- ²³ 福澤一吉『文章を論理で読み解くためのクリティカル・リーディング』NHK出版新書、2012年4月、p.192
- ²⁴ 安永悟「協同による活動性の高い授業づくり」『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房、2015年1月、p.114
- ²⁵ 安永悟 同掲書、p.116
- ²⁶ 安永悟 同掲書、p.123
- ²⁷ 松下佳代・小野和宏・高橋雄介氏の「レポート評価におけるルーブリックの開発とその信頼性の検討」『大学教育学会誌』35、2013年1月、p.111
- ²⁸ ダネル・スティーブンス、アントニア・レビ、佐藤浩章監訳『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部、2014年3月、p.iii
- ²⁹ ダネル・スティーブンス、アントニア・レビ、佐藤浩章監訳、同掲書、p.4
- ³⁰ 福田誠治『知を創造するアクティブ・ラーニング 国際バカロレアとこれからの大学入試改革』亜紀書房、2015年12月、p.3
- ³¹ エリザベス＝バークレイ、パトリシア＝クロス、クレア＝メジャー著、安永悟監訳『協同学習の技法』ナカニシヤ出版、2009年9月、pp.V-VI
- ³² エリザベス＝バークレイ、パトリシア＝クロス、クレア＝メジャー著、安野舞子訳、同掲書、p.188
- ³³ 松下佳代「ディープ・アクティブラーニングへの誘い」『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房、2015年1月、p.18

A Study on Japanese expression techniques and collaborative learning techniques

Keiko OGIHARA, Kazunori MIYAMOTO

Course of Principal Human Sciences, Department of Human Development, Faculty of Humanities, Kyushu Women's University

1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyusyu-shi 807-8586, Japan

No English abstract